# 岡田寛の香川新音楽事情 18

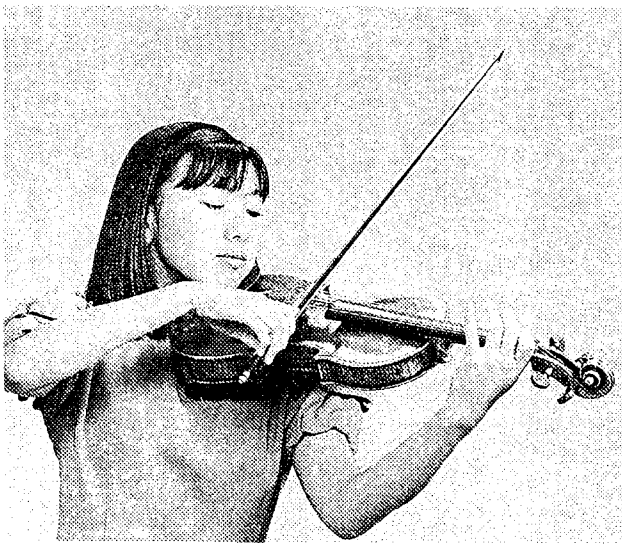
## 香川日墺協会の確かな試み④

# 気軽で楽しいクラシックの集い

## 好評博した「バイオリンの夕べ」

『カタい、窮屈、知ったかぶり、拍手の間が難しい、説明なしでも分かって当然という偉そうなシタリ顔、だから聞きたいなと思ってもわざわざ出かけるのはチト億劫』

わが国でクラシック音楽会のイメージといえば先ずこんなところ。だが成熟した文化の町ウィーンでは違う。すべては「音楽を楽しむ」スタンスから始まる。演奏前と途中の幕間にはロビーでワインやビール、オードブルをつまんで歓談するのが普通。その為、途中休憩はリサイタルでも三十分、オペラでは四―五十分もある。無論、開演時には完全着席、五分と遅れない。音楽会の始まりは午後七時半より前ということはない。例外は長時間オペラだけ。盛装に着替えてくる時間は十分。終演後もレストランは開いているが地元の人は幕間軽食が夕食代わり、家へ帰ってその夜の演奏を反芻して楽しむ。



押鐘美名子さん

花束を贈られた木村一三さん

それでいて、流石にホンモノ聴衆、演奏自体には常に厳しい。

今年一月二十九日、ボクと同行してウィーンを初めて訪ねた香川日墺協会の友人たちはフェラインザール（楽友協会ホール）でウィーン放送交響楽団を聞き、演奏が気に入らなくてアンコール拍手もせず一斉に退場する大勢の聴衆に驚いた。世界一響きの良いホールの権威あるコンサート、日本でなら、出来不出来に関係なく手を叩き続けるに違いないからだ。

協会行事で、音楽が好きな会員なら誰もが喜ぶこの「気軽で楽しいクラシック」を企画の中心に据えようと考えたのは勿論ウィーン会議の仲間。だって楽しくなくては長続きしないではないか。

第一弾は一九九七年八月十九日、「押鐘美名子バイオリンの夕べ」。所沢市在住、東京芸大附属高校二年、九五年全日本学生音楽コンクール優勝の逸材。協会顧問でもあるウィーンフィルのコンサートマスター、ライナー・ホーネックに師事した縁でミニ公演が決まった。

フロアの椅子を放射線状に配置、開演前と休憩時には出演者も加わって飲み物や軽食で懇談。参加費二千円。ウィンナケーキとコーヒー、オーストリアワイン、ウィーンビールの大手ゲッサーなどは別途実費、一律五百円。これが良かった。定員百名、満席の聴衆は実にいい気分で素晴らしい「集い」を楽しんだ。

## 軽アルコールでいい気分

第二弾は十一月十日、無類のオペラ通、協会監事の弁護士木村一三によるトークとCDコンサート「オペラ・オペレッタの魅力」。こちらはコーヒーとオープンサンド込みで参加費千円。やはり欠かせないのはウィーンの軽アルコール。むろん実費別途だが断然好評。この素敵な企画成功の陰には多くの女性会員参加とメンバーのプロフェッショナル協力が光っている。会場提供の「三越高松店」、ゲッサービール配給元「ヒサモト」、オーディオ提供「タマル」などトップ企業。ボクも解説で手伝ったのはいうまでもない。

その後、押鐘は引き続きウィーンでホーネックの指導を受けて芸高に復学、研鑽中。木村のトーク&CDコンサートは、翌年もアンコール企画で好評を博している。

（文中敬称略）

ウィーン楽友協会ホール（平野牧子さん撮影）